

令和 2 年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
 (新学習指導要領に向けた実践研究)
 成果報告書 (概要)

受託団体名
国立大学法人金沢大学

1 指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
国立大学法人 金沢大学	特別支援学校	知的障害	かなざわだいがくにんげんしゃかいがくいきがっこうきょういくがくるいふぞく 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属 とくべつしえんがっこう 特別支援学校

2. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
令和 2 年 6 月	知的障害児における「主体的な学習」、「対話的な学習」の全教員における定義づけと共通理解の実施。各学部の授業づくり開始。	知的障害児における「主体的な学習」「対話的な学習」の定義が明確になった。
令和 2 年 7 月	オンライン授業における使用教材等の著作権に関する講座 (講師：弁理士)	授業で使用する教材の著作権に関して教員が意識できるようになった。
令和 2 年 9 月～11 月	地域・人などの関わりを通した知的障害児の「主体的・対話的で深い学び」による授業実践開始。	地域・人との関わりを重点において授業実践を計画できた。
令和 2 年 10 月	地域・人などの関わりを通した知的障害児の「主体的・対話的で深い学び」による研究授業の実施。(講師：大学教授)	授業改善のポイント、本研究のポイントについて助言を受けた。
令和 2 年 11 月	地域・人などの関わりを通した知的障害者の「主体的・対話的で深い学び」：新聞記者による学校新聞の作り方と地域発信方法の学習	学校から地域発信を見据えた学校新聞の作製方法を学ぶことができた。
令和 3 年 1 月	地域・人などの関わりを通した、知的障害児の「主体的・対話的な学習」の授業実践におけるゲストティーチャー招聘【中学部での国語指導(書道家による書き初め指導)】(講師：書道家)	地域の書道家から国語の指導を受けることで生徒の言葉に対する興味関心が育まれた。
令和 3 年 1 月	地域・人などの関わりを通した知的障害児と大学生との交流学習【オンライン学習】 (実施者：大学 3, 4 年生 15 名)	他県の大学生との交流学習を行うことで児童生徒は主体的に学習に参加する姿が見られた。

令和3年2月	実践研究結果の全国発信のため、教育研究会のオンライン実施（参加者：120名）、紀要の作成及び全国配布。	オンライン教育研究会で78.9%の参加者が「参考になった」という意見がアンケート調査で明らかになった。
令和3年3月	学校研究協力者会議の実施 本校の学校研究の実施状況、進捗状況を報告	本校の学校研究及び教育研究会の実施状況の報告を行った。研究協力者の方々からは、新しい取り組みが多くみられ、とても良かったという評価を得た。

(2) 研究課題

地域社会との関わりを通して、知的障害児が主体的で対話的な深い学びを育む授業づくりの学習体系を探求する。

(3) 研究の概要

本研究では、社会との接続を意識し、子供たちが社会的・職業的自立に向けて主体的・対話的で深い学びを行い、育成すべき資質・能力の獲得を目指し行った。その取り組みは以下の通りである。

① 地域社会での様々な人と関わりながら学ぶ「協働及び交流学習」

本事業は、知的障害のある児童生徒が地域社会の中で様々な人と関わりながら学ぶ「協働及び交流学習」を年間を通して系統立てて行うこととした。小学部は身近な人との関わりを中心に、中学部では、地域の特色を題材として身近な商店街や企業との交流を深め、高等部では、過去より継続して地域との防災学習を行ってきた。

② 学びのつながりを大切にした教育目標「つきたい力」の設定

本校では「学びのつながり」の重要性を教員間で共通認識を行い、全ての授業において「学びのつながり」を意識した授業実践を行った。

③ ふりかえりを大切にした学習評価方法の確立

本校では、教員の授業づくりに関する評価は、本校独自シート「教科等特徴シート」を用いて行った。また、児童生徒の学びのシートは、観点別による学習自体を評価だけではなく、学びによって育っていく力の評価も可能にした本校独自のシート「授業アセスメントシート」を用いて学習評価を行った。いずれの評価シートを使った評価方法においても児童生徒及び教員が学びの「ふりかえり」を確実に行うことが大前提に、日々の教育実施を行った。

(4) 研究の成果

今年度は、以下の3点に絞って学習を展開した。

① 地域社会での様々な人と関わりながら学ぶ「協働及び交流学習」

知的障害のある児童生徒が地域社会の中で様々な人と関わりながら学ぶ「協働及び交流学習」を年間を通して系統立てて行ってきた。児童生徒の発達段階において必要とされる個々の学びのニーズに合った教育を児童生徒に提供するには学校教育のみで行うことには限界がある。そこで、地域社会と関わり

を大切にしながら学校現場での教育との連続性を重視し、3年間継続して行ってきた。

② 学びのつながりを大切にした教育目標「つきたい力」の設定

学習指導要領の育成すべき資質・能力を獲得するため、学部ごとに児童生徒が「何ができるようになるか」という観点を本校では具体的に「つきたい力」という形で設定し、その力の育成に向けた授業づくり及び実践を行ってきた。また、各学部とも3年間継続した「つきたい力」を設定した。

③ ふりかえりを大切にした学習評価方法の確立

本校では、様々な学習評価方法を用いて試行錯誤を繰り返し行いながら学習評価の確立を行ってきた。また、本校独自の評価シートを使った評価方法においても児童生徒及び教員が学びの「ふりかえり＝児童生徒が自分の学びをどのように考え、その学びがどのように活かされるのかを児童生徒自身で考え述べること」を確実に行うことが大前提であり、最も大切な要素であるという点を教員間で共通認識を行い実施した。

(5) 課題と今後の方策

課題と今後の方策は以下の3点である。

① 地域社会での様々な人と関わりながら学ぶ「協働及び交流学习」の継続性について

本事業の3年間は、学習の場を学校単独で行うのではなく、地域社会との連続場の中で学習を展開してきた。この取り組みを継続するには、地域社会とのつながりが持てるような学習システムが必要であり、今後の大きな課題であった。

今後の方策としては、地域社会に学習を依存するのではなく、その学習の成果を地域の方々にフィードバックする仕組みを構築する必要があるといえる。

② 授業評価のための本校独自シートについて

本事業の初年度、教員は2つの独自評価シートを授業ごとに丁寧に記録してきた。しかしながら、この記録には膨大な労力と時間がかかるという課題が出来てきた。

今後の方策としては、この独自評価シートの内容を精選し、実際の教員が現場で使用しやすい効果的な学習評価シートを提案していきたい。

③ 各教科の見方・考え方について

特別支援教育における「合わせた指導」等の中においては、各教科の見方・考え方を的確に反映させることは難しく、学ぶべき目標が曖昧になる傾向があるという課題が残った。いわば「活動あって中身無し」という授業が散見された。今後の方策としては、「合わせた指導」という指導方法と教科との関係性を全教員で再確認する必要があるものと思われる。